

司会の言葉

細山田 明義*

近年、分子生物学的研究の発達により、循環制御に関与する内因性ホルモンが次々と発見され、それに関係する疾病の予防や治療に細胞レベルでの研究がなされつつある。本学会の学術集会では、循環制御に関する問題を積極的に研究され励んでいる若手研究者の発表を拝聴し、優れた発表者を表彰したいとの主旨から計画されたコンペティションを開催している。本年度は5編の応募があり、司会を仰せつかった。岩手医大、齋野先生(解剖学)はリアルタイム共焦点レーザー顕微鏡を用いて、血流調節に重要な役割を果たしている細動脈の働きについて、細胞内カルシウム濃度の変動を画像解析することにより、血管作動物質を用い、その強さや持続時間について観察した結果を述べられた。岐阜大、荒井先生(内科)は *N*-methyl-1-deoxynojirimycin (MOR-14) の虚血心筋に及ぼす作用について、虚血心筋の保護メカニズムが ischemic preconditioning における保護メカニズムとの類似性を検討した結果を報告された。protein kinase C (PKC) の関与について、PKC ブロッカーを用いた群を対照に比較され、心筋保護のメカニズムに PKC が関与していることを証明され、その機序に PKC ϵ アイソフォームの細胞内分布の変化が関与している可能性を示された。大阪薬大、西堀先生(臨床薬剤学)は心室性不整脈の治療薬メキシレチンの薬物動態について、血中、尿中のメキシレチン及び代謝物を測定し、加齢あるいは疾患の影響について検討された成果を報告され

た。疾患による差は認められないものの、薬物クリアランスに加齢の影響が大きいこと、また、代謝されない未変化体が尿中に多く排泄されていることを述べられた。経皮的心肺補助装置(PCPS)は心原性ショックや周術期循環不全による低心拍出量症候群(LOS)にIABP同様用いられる方法である。東京女子医大、古川先生(心研外科)は過去7年間における同施設でのPCPS施行例28例についての成績について報告された。同施設でのPCPS装置の発達による変遷と回路の工夫について述べられた。ヘパリンコーティング回路の導入や本装置にリザーバーを付加することによりポリウム調節が可能になったこと、長時間使用による熱損失を防ぐ装置で体温調節が可能になったことなどについて報告された。経食道心エコー法(TEE)は虚血性心疾患の術中管理モニターとして注目され頻用されている。東京女子医大、鎌田先生(麻酔科)は閉塞性肥大型心筋症の麻酔管理にTEEを用いられ、術式の決定に役立つこと及び人工心肺離脱時の心機能評価に有用であることを報告された。基礎的研究、臨床研究がそれぞれ発表されたが、虚血性心疾患を中心に血管系病変が年々増加している今日、これらの分野はその本態や治療方法にも未解決のことが多い。今後、基礎的、臨床的研究により解明されなければならぬ問題が山積みされている。優れた研究成果を今後共発表していただくことを期待し、切望したい。

*昭和大学医学部麻酔学教室